

(30)

氏名(生年月日)	野 口 友 義
本 籍	
学 位 の 種 類	医学博士
学位授与の番号	乙第782号
学位授与の日付	昭和61年11月21日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当(博士の学位論文提出者)
学位論文題目	直腸癌の術前照射効果に関する臨床病理学的研究
論文審査委員	(主査) 教授 羽生富士夫 (副査) 教授 広沢弘七郎, 教授 重田 帝子

論 文 内 容 の 要 旨

目的

直腸癌に対する術前照射は、局所再発を減少させ、手術成績を向上させる目的で施行されているが、局所再発因子のうちどの因子に効果があるかについては、未だ詳細な報告はない。著者は、局所再発と密接な相関関係を示す因子として、1. 直腸壁の脈管への癌の侵襲(リンパ管侵襲ly, 静脈侵襲v), 2. リンパ節転移(n), 3. 外科的剥離面(ew)を考え、術前照射がこれらの因子にどの程度の効果をもたらしているかを照射後摘出標本を用いて検討した。

対象および方法

1) 対象

1982年より1985年までに東京女子医大消化器病センターにおいて、術前照射後手術を施行した直腸癌の20例を照射群とした。対照として同じ時期に手術のみを施行した手術単独症例の55例を非照射群とした。

2) 照射方法

照射装置としてLinear-accelerator 10MV-X線を用いた。照射範囲は全骨盤腔を含む照射野で行った。線量は1回200cGyで、総量30~40Gyを照射した。

3) 検索方法

照射の組織学的効果は、H.E染色による組織学的検索により行い、判定基準として大星・下里修正分類を用いた。

結果

1) 脈管侵襲(ly, v)に対する効果

ly陽性例の頻度は、照射群で90.0%、非照射群では90.9%であった。v陽性例の頻度は、照射群で65.0%、

非照射群では56.4%であった。両因子に関して有意の差は認められなかった。

2) リンパ節転移(n)に対する効果

転移リンパ節51個のうち26個(51.0%)には全く照射効果が認められなかった。効果の認められた群でも、癌細胞の消失は1個も認められなかった。

3) 外科的剥離面(ew)に対する効果

ewに対する照射効果をみるために、直腸癌の層別に癌腫に対する照射効果を検討した。癌細胞消失の頻度は、粘膜層30%、粘膜下層及び固有筋層5.3%、外膜下層31.6%、外膜外組織50%であり、外科的剥離面における癌の露出(ew+)の原因となる外膜外組織に対して顕著な効果が認められた。

考察

直腸癌の局所再発の大部分は、リンパ流(n, ly)及び外科的剥離面(ew)に起因するといわれる。術前照射がewの部の癌腫に対して有効性が高いことは、従来ew対策として隣接臓器合併切除しか方法がなかったこの分野に大きな進歩をもたらしたといえる。一方、照射がn, lyに対しては有効とはいえず、手術時に十分なリンパ節郭清が必要なのは勿論、照射方法の工夫、集学的治療法の開発等が更に望まれる。

結論

術前照射は直腸壁の層別にみると、外膜外組織に対して50%の癌細胞消失と最も著明な効果を認めた。従ってewに起因する再発防止に有効と思われた。一方、ly, v, nに対しては有効ではなかった。

論文審査の要旨

本研究は、直腸癌に対する術前照射の意義に関して、臨床病理学的に検索し、術前照射が、直腸癌のリンパ節転移および脈管侵襲に対するよりはむしろ外膜外癌腫に有効性が高いことを明らかにしたもので、学術上価値あるものと認める。

主論文公表誌

直腸癌の術前照射効果に関する臨床病理学的研究
日本大腸肛門病学会雑誌 第39巻 第6号
749～757頁（昭和61年9月発行）

副論文公表誌

- 1) 腸管嚢胞様気腫
Medicina 15 (6) 919～920 (1978)
- 2) 経過観察しえた腸管嚢腫様気腫の1例
胃と腸 15 (3) 335～339 (1980)
- 3) 穿孔性腹膜炎をきたした小腸 Crohn 病の2手術例
日本大腸肛門病学会誌 36 (4) 380～385 (1985)
- 4) 潰瘍性大腸炎の結腸全摘後小腸再燃の2例
日本大腸肛門病学会誌 38 (1) 32～36 (1985)
- 5) 大腸憩室炎
臨床消化器内科 1 (5) 591～600 (1986)
- 6) 大腸癌
現代医療 18 343～348 (1986)
- 7) 結腸憩室
外科 47 (11) 1180～1184 (1985)
- 8) 胃切除後の愁訴一胃・十二指腸潰瘍を中心に
日臨外会誌 39 (1) 35～39 (1978)
- 9) 腫瘍免疫へのアプローチ 癌患者の免疫状態および免疫療法を中心に
東女医大誌 46 (12) 983～987 (1976)
- 10) 消化性潰瘍に対する外科的治療
東女医大誌 47 (9) 1069～1075 (1977)